

# 誰かの犠牲の上につくる電気はいらない これを機にエネルギーシフトを!

福島第二原発から20km圏内の川内村にある猿原人村という、毎年8月に開かれる「満月祭」で知ってる人も多いだろう。元々コミュニティとして始まった猿の地に10年ほど前から住みついた大塚愛さんは、大工修行をして自分が住む家を建て、電気も水も含めた自給自足の暮らしを送ってきた。子どもが2人生まれ、地元で『六力所村ラプソディ』の上映会を開いたこともある。

東北大地震では自作の家にほとんど影響なかったにもかかわらず、原発事故のため、地震発生当日の夜に避難。以来、岡山に移住しており、今のところ戻る見込みはない。その愛さんに、自給自足の暮らしと原発事故で感じたこと考えたことを聞いてみた。(あ)

自給自足の平和な暮らしが、ある日突然避難生活に

大塚 愛さん



←避難先の岡山、こどもの森公園で下の子と。

## —— 猿に住むようになったきっかけは？

●99年に農業がやりたい、自給自足がしたいと思って、本で調べて猿を見つけたんです。前は農業研修を受け容れていて、それは古い情報が本に載っていて、問い合わせの手紙を書いたら、今は受け容れてないですよと言われて、でも遊びに来てねーくらいの返事もらって、でがっかりしてまた調べていたら、福島県で川口由一さんのやりかた、不耕起栽培でやってるやまなみ農場っていうのを見つけて、そこがぴぴと来てやまなみ農場に研修に入ったんだけど、猿にももちろん遊びに行ってたんです。それでやまなみ農場で研修をし、初めて田んぼと畑をつくり、そういうものを加工して食べるような生活を習ったんです。で、半年間が終了したあと、もうちょっと福島でやっていきたいなという思いがあって、

—— 猿の祭りにでも行ったのがきっかけなのかと思ってたけど、ちがうだね。

●あーそうじゃなくて、農業関係で行ったんですよ。電気の来ない山の中でやってます

と書かれていて。インドネシアでのワークキャンプに行った時に、電気のない山の中で一週間くらい暮らしたことがあるんです。で、その時のよさというのを覚えてたので、あー今どき日本で電気が来ないところがあるんだーと思って、気になって手紙書いたんです。それで猿に入ることになったのは個人的な事情があったんですが、やっぱりその時にいいなーと思って、ここで1年くらい住んでみたらいいけどと聞いてみたら、「じゃあ空いてる処に小屋をつくって住んでいいよ」と言ってくれたんです。その時はマサイさんたち夫婦と青木さんのファミリーと、あとトシちゃんというジャンベをやる男の子が猿に住んでいて、私が4軒目に入ったんです。

—— 前にたまたまTVで、自分で家を建てて自給自足の生活をしている女性がいるという番組を見て、自分で家をつくるなんてすごいと思ってびっくりしたんです。

●はい、「自給自足物語」かな。農業研修をやった時にちょっとは大工仕事も手伝ったこともありますけど、ほとんどど素人で、でも猿の周りの人ってみんな自分で家を建てて住

んでる人が多いから、そういう空気もあって、やってみようと思ったんです。で、とりあえず1年とってたので、大きい家はたいへんだし、まず最小限にした方がいいってアドバイスをもらって、最小限のスペースってどれくらいかなと考えたあげく、3畳だと思ったんです。1間の1間半で、ベッドが1畳分あって、こっちの角に薪ストーブがあって、水道は外につくったんです。それで山の伐採跡にけっこう使えるような丸太があるから、そういうのを拾ってきたり、通りがかりの廃材を積んであるようなところから集めて、必要な道具も、ノコとげんのうとノミー本だけ買って、だからぜんぶ人力で一ヶ月くらいでつくったんです。その頃は水平器なんていう道具も知らなかったから、考えたあげく石に糸を結びつけてぶらさげて真っ直ぐを見たりとか、ほんとは見よう見まねで考えながら作って…

—— どれくらい住んでたの？

●5年くらい(笑)。材料費が2万5千円の家だったから…。1年とってつくったんだ

けど、住みだしてすぐ村の大工の親方と知りあって、4年間、大工修行をすることになったから、けっきょく4、5年そこに住むことになった。

—そして、また建て直したわけだね？

●そうですね。夫と知りあって一緒に住もうってことになって、夫は最低限、電気と電話があるところがいいと言ったんです。横浜の都会っ子だから。それが春だったんですけど、年内には家を作りたいねという話になっていて、それからあっちこち土地を探したんだけど、摸よりいいと思える場所がなくて、なかばずるずる摸にしようってことになって、その3畳の小屋のすぐ後ろを切り拓いて、今度は本格的な、20坪くらいの家を建てたんです。大工の修行は4年くらいやって、そのあと小屋に住みながら1年くらいかけて。

—さいしよ大工に弟子入りした時は？

●それまで2ヶ月くらい親方の現場をちょこちょこ手伝っていたので、私がそういうことやりたいのを何となくわかっていて、でも思い切って申し出た時は、女だからだめっていうのは全然言わなくて、ただ大工っていうのは4、5年毎日現場に通って年季明けして一人前になるというのがあるんです。で、やるからにはそこまでちゃんとやる気があるのかと聞かれて、時間的に拘束されるのは辛かったし、週7日のうち、たとえば畑や田んぼやったり薪つくったりもあるから週4日がいいって申し出たんだけど(笑)、ダメって言われて。やるからには週5日と言われて。ううーとか思ったんだけど、時間の拘束の意味では辛かったけど、それ以上に大工をやりたいっていう気持ちが強くなってたから、思い切ってこの船に乗ってみようっていう気持ちでやることにしたんです。

で、なぜ大工をやりたいと思うようになったかという、その前の年に四国の八十八力所を歩いて旅したんです。

—それは渋いねえ。みんなインドとかタイにはよく行くけど。

●いえ、その前の年までインドやネパールに行っていたんです。それで気持ちがだんだん日本に向かうようになってきて、それに一番近いのが遍路道だったんですよ。ずっと歩いて旅して、すっごいインドやネパールに行った時とおなじ空気を感じました。歩いてる人たちも似てたし。

—お遍路さんの白い格好して歩いたの？

●さいしよは何も持たずに行ったんだけど、一番さいしよのお寺で知りあった人から、せっかく歩くのならやっぱりそういう格好した方がいい

ぞって言われたから、傘と上着だけ着て、下は短パンみたいなのはいて、あと、杖も途中でもらったりして、半分お遍路さんの格好でしたね。それで野宿も初めてだったから…

—宿には泊まらずに野宿した？

●宿もあるんだけど、それは1泊5000円くらいするから、けっこうかかるんです。それでお寺の門の上の2階のところとか、神社の軒下で寝たりとか。寝袋だけで。テントも持ってきてる人がいましたけど、途中で重いから送り返したりしてましたね。けっきょく屋根と壁があるところを見つければ寝れるし、遍路道の周辺の人たちはもう何百年もお遍路さんの世話をしてくてるから、学校の体育館の軒下でお遍路さんが寝ても、別に不審者とは思わないんです。そういう文化もあって。あとお遍路さんを襲う人はいないと言われてたから。で、さいしよは一生懸命寝るところを探して歩いてたんだけど、だんだん慣れてきて、猫みたいにならざるを得ないところを見つけれようになっちゃって。(笑)

—どれくらい歩いたの？

●さいご高野山に行くのも入れて2ヶ月くらいですね。それはアジアの方に気持ちが向いてた時から日本に切り替わった時期で、じゃあ、どう生きていこうかなーって考える時期だったので、旅の中で、歩きながらとか、仏様に手を合わせながら考えてたんです。

—それで摸に入って、そのつくった小屋には電気とか水道はなかったんだ。

●小さな小屋に住んでた時は、水は沢からひいてきたんです。高低差で100mくらい先からひいてきて、立ち上げて蛇口つけて流し台を置いて、あとから屋根をかけて。灯りは石油のランプだったんです。そしてお風呂は2年目くらいに五右衛門風呂をつくったんです。そして、洗濯だけは大変なんですよ。電気がなくて。冷蔵庫はなくても何とかなるんだけど、洗濯は冬物なんか、むこうは水が冷たいし…。それで大工修行が始まってから、親方がそんなん手で洗ってたら仕事にならんだろうって、発電機と洗濯機をセットで持ってきてくれて、それで洗濯するときだけはうるさいですけど、ぶるんて発電機を使ってたんです。あとは電気使ってなかったですね。冷蔵庫も。食事は、お肉は元々食べなかったんで、大工の仕事の帰りにお魚買って帰ってきたりとか、そんなかんじで。

で、大きな家をつくってからは、ランプではなんとも暗いし、夫も暗いのが苦手だし電気がほしいってことで、ちょうどその時、知り合いの人が中古のソーラーのパネルを1枚とコント



ローラーとインバーターとバッテリーと、最低限のセットをプレゼントしてくれたんです。150wのパネルだったんですけど、それで真っ暗な夜にセットして初めて60wくらいの裸電球をつけたら、明るい〜!!って、ほんとに暗闇に灯がもったっていうかんじでしたね。文明の利器!っていうかんじ(笑)で感動して、それがきっかけで何となくソーラーの仕組みがわかってきて、じゃあ新しい家には電気を入れようってことになってきて、東京の中央電気っていう会社に縁があって行ったら、接続とかいろいろやり方を詳しく教えてくれたんです。それで新しい家にはまず4枚のパネルを入れて、灯りや洗濯機、冷蔵庫も置くようになって、パネルも増やして電気が入っていったんです。

—地震で建物や電気は大丈夫だった？

●そうそう、ソーラーの独立電源だから、そういう意味ではまったく影響なくて、それに建物もうまーく揺れてくれたみたいで、うちも震度6強くらいあったんだけど、ガラスコップが2ヶほど割れたくらいで。

—大工修行やっただけのことはあるね。

●まあそういうことにはしておきましょう(笑)。そういう意味では、地震は大きかったけど、水も井戸だし、夕方には生活再開!ってかんじだった。

—原発事故が起きて冷却できないとかニュースを聞いたのはTVで？

●ラジオではIAEAが、原発はちゃんと止まったから大丈夫だと言ってたんですけど、夫がマサイさんちに行ってTVを見てた時に、誰かが冷却水が止まったってひと言いたらしいんです。うちにもTVはあって衛星放送が写るんですけど、なぜかその時はつけてなくて。それでやばいんじゃないかって話してたら、こんどは3km圏内は避難指示が出て、その夜のうちに避難した。

—それはす早いねー。

●だって近いもの。第二原発からは20kmない距離で、なにかあったらすぐだから。とりあえずは離れて寝ようっていう、40kmくらいのと

↑2回目につくった家は20坪もある立派な家だ。東北大地震の震度6強にもびくともしなかった。

ころまで行って車の中で寝て、途中2泊して、岡山に着いたのは13日。

どっちかという夫の方が私より早く、離れた方がいいって決めたんです。もちろんチェルノブイリのことを本で読んでたし、ハイロアクションで活動してたこともあるし。で、とりあえず40km離れたところで様子を見てたら、朝、ハイロアクションの仲間からメールが来たんです。携帯はぜんぜんつながりませんでした。メールは使えて、危ないからもっと逃げた方がいいという情報がきて、それで12日には80kmくらい離れた会津若松まで行って様子を見てたんです。

全く収束に向かわない状況に、夫はもっと離れようと思いました。でも、私はそれ以上わが家から、川内村から離れたくなくて、どうしたらいいか、わからなくなってしまった。しばらくそんな時間があつた後、ある瞬間、「ああ、そうか。私が昨日まで暮らしていたあの獲にも、放射能来ちゃったんだ・・・」と認めた時があつて、それでつらくて悲しくて、しばらく会津の路地裏で泣きました。そして、どこかに避難するしかないと思い、やっと実家のある岡山に向かうことを決めることができ、新潟へ向かいました。その夜、新潟から南下する車の中で、原子力委員会(?)が水素爆発についての記者会見するニュースを聞きながら、「なんてことしてくれたんだ・・・!」と、ぐぐ〜と天まで昇っていくような怒りとも悲しみともつかぬ感情を感じました。よく腹は立たないのか?と聞かれますが、怒りを感じたとしたらそれ一度、あとは悲しみ。何度泣いても、涙が流れる深い悲しみです。たいていのことなら、涙を流して感情を味わったら、消化して乗り越えられるんだけど、今回のことは一生ムリって思うくらい、心の奥がずっと悲しい。

—— ハイロアクションは前からずっと関わってた?

●ハイロ(廃炉)アクションは、今年の3月に福島原発が40周年になるので廃炉にしてくれということなんです。去年の秋くらいに始まったんです。それまではプルサーマル導入を止めてくれという活動を活発にしてたんだけど、けっきょく入ることになってしまって、それが終わってからですね。ハイロアクションということで、3月から1年間をハイロアクション年ということにしよう。

でも、まさかこんな形で廃炉になるとは・・・

—— 今後はまた獲にもどるつもり?

●5月の中旬に2ヶ月ぶりで久しぶりに帰ってきたんだけど。なつかしいし・・・ほんとになんにも景色変わってなくてね。放射能って見えないんだなとほんとに思っ。うーん。帰りたい気持ちはあるけれども、帰れないかなーと思っ

ます。家に戻ったときにガイガーカウンターを持って行って測ったら、事故前は20CPMくらいだった値が100くらいになっていて、地面に近づけると150くらいに。そして雨樋の水が流れてくるところでは1800になっていて、ぴぴぴびーって鳴るんです。で、見た目は全くわからないんですよ。もし一次的に子どもが帰るかもしれないと思っ、その土を3cmくらい取って敷地のはじっこに運んだんです。そうすると半分の900くらいになり、まだ高いのでもう3cmとって見ると、また半分の400代になりました。でもその雨樋の下って、子どもが雨が降ってきたらいつも水で遊んでいたところなんです。だからちょっと帰る分にはいいけど、生活してたらいろんなところで口に入ってくるし、食べ物や飲み水のこともあるからねー。私は岡山にいられる家もあるから、そういう場所があるんだったら、子どものために帰っちゃダメなんだなーっていうのがあります。

—— 自分で建てた家や畑があつても?

●いやー、ほんと、もうー。こないだ帰った時、畑にひまわりの種を蒔いてきたんです。家を眺めても、柱の一本一本、すべてに思い出があるし、場所も大好きだったし、周りに住んでた仲間とか、マサイさんボケさんも家族のような人だったし、もうすべてが大事なもんなんだけど、でもどうかなー、わかんないですねー。

—— 川内村も原発城下町みたいだったの?

●そうですね。額は知らないけど交付金みたいなお金も下りてたと思っし、原発関連の仕事をしてる人も多かったみたいです。

—— 原発の話は言いにくい雰囲気だった?

●そうですね。4年前に「六カ所村ラブソディ」の映画の上映会をしたと思っ、企画して村でやったんです。その準備したときはやっぱり言いにくい空気がありましたね。マサイさんにも、「よくこんなところでそんな上映会を企画したね」って言われましたけど(笑)。村議会議員やってる人にも相談しに行ったら、水俣の問題にも関心を持ったことある人で、意外と理解を示してくれたけど、「でもねえ、愛ちゃん、こういうところでそういうことすると、いろいろ大変なんだよー」と言われて(笑)、でも小さな村にしては70人くらい見に来てくれてよかったんだけど、やっぱそのことで口を開きにくい空気がっていうのは感じましたねー。「反対」って言うことで、賛成派・反対派と分かれてしまうような、分断が生まれてしまうようなのもいやで、そういうのを乗り越えて考えていこうっていうのを、あの映画は提示してると思っんですけど、なかなかそこには行かれない・・・。そういうことを言うこと自体が、じ

ゃあ俺達の仕事を奪うのかっていうふうになっちゃうからねー。

でも親方に聞いたら、原発で働きに行つて亡くなった人がちらほらいて、村の人は恩恵も受けてるけど、国や東電が言ってるように、原発がほんとに安全かといつたらそうじゃないってことも肌で感じてる部分もあると思っんですね。

うちなんか、極端な話しですけど、そこに住んでた12年間、原発の電気とか一般の電気を使わずに生活してたでしょ。電気はもう畑で出来てるものという状態で、そういう生活感覚からすると、誰かの健康を脅かしたり、誰かの犠牲の上につくるといっはおかしいなと思っ。同じ電気をつくる仕事だったら、原発に働きに行く代わりにソーラーパネルの工場に働くとか、燃料電池の工場に働くとか、同じ村にそういう工場ができたらいのになつて、すごく思っますね。

●今までは原発がクリーンでいいエネルギーだと宣伝してきたけれど、やっと安全神話が壊れて、関心を持ちだした人はいっぱいいると思っんです。これを機にいろいろ学んでいっほしいなと思っます。ただ原発のよくないところを羅列しても、どう変わっていくかということまで考えないと、けっきょくそこまになつちゃうから、どうやったらエネルギーシフトができるのかとか。たとえば送電線を分離して自由化するとか、自然エネルギーで電気をつくる会社が参入できて、使う側も電気を選べるようになっていったら、ぜったい自然エネルギーって伸びていくと思っますよね。

原発でつくった電気は使いたくないと思っても、北欧などのように電力が自由化されていない日本では、その地域の電力会社から電気を買うしかなく、選べないのが実情だ。

しかし愛さんのように自分の畑(に置いたソーラーパネル)で電気をつくって使うという暮らしをすれば、電力会社に頼らない暮らしができる。社会的には電力自由化を求め、原発を無くす運動をしながら、同時になるべく自分の暮らしを自給自足自立したものに代えて行けたらいいなと思っ。(あ)

→ 今までは郵便物は「福島県川内村 大工の愛ちゃん」で届いていたという。地元の有名人だ。

